板橋春夫　著
『群馬を知るための12章 ―民俗学からのアプローチ―』
みやま文庫（前橋市）　2012年８月
223頁　1,500円（みやま文庫会員外価格）

群馬県には，文化振興を目的とした会員制の郷土出版団体「みやま文庫」がある。みやま文庫のシリーズでは，群馬県の自然，歴史，文化を中心に，多様なテーマで創刊以来200巻以上が刊行されている。本書は，その第206巻として刊行されたものである。

本書の著者は，群馬県伊勢崎市・赤堀町を拠点として活動している民俗学者である。しかし，著者の視点は狭義の民俗事象にとどまらず，広く自然環境や景観に及び，地理学・歴史地理学との接点が多い。否，接点が多いどころではなく，地理学「専属」のテーマなどと安閑としていると，著者の所属領域に取り込まれてしまうという緊張感を持つほどに，著者の視点は意欲的かつ魅力的に感じられる。評者は本書についてそのような読後感を持ったゆえに，地理学・歴史地理学の研究者に対して本書の紹介を思い立った次第である。

本書の構成は下記のとおりである（コラムなど，一部省略）。

まえがき
第一章　餅なし正月の世界
第二章　湯かけ祭りと温泉民俗
第三章　ひなまつりの民俗
第四章　赤城山―祖霊の籠る山―
第五章　養蚕の民俗
第六章　水文化と川魚の民俗
第七章　七夕と眠り流し
第八章　雷の民俗
第九章　石垣のある村―景観と生業の特色―
第十章　長寿のあやかり―赤飯・長寿銭の民俗―
第十一章　空っ風と民俗文化
第十二章　十二様と出産習俗
付　録　群馬の民俗行事概説
あとがき

構成をみると，章のタイトルに「民俗」の語が添えられてはいるものの，取り上げられているテーマには，「温泉」「赤城山」「養蚕」「水」「川魚」「雷」「石垣」「空っ風」など地理学・歴史地理学からのアプローチも十分可能で，現に成果が蓄積されているテーマが含まれている。これらの研究対象を民俗学ではどのように論じるのか，関心が高まるところである。以下，本書の要点を紹介したい。

第一章「餅なし正月の世界」では，坪井洋文著『イモと日本人』（1979，未来社）をベースとした畑作文化論を基軸に，群馬県内の「餅なし正月」が紹介される。

第二章「湯かけ祭りと温泉民俗」では，湯かけ祭りや開湯伝説など民俗学特有のテーマも扱われるが，草津・万座・四万温泉において，かつて冬季は大半の住民が引き揚げ，ごく少数の住民のみが残留した「冬住み」の慣行や，観光化にともなう湯治習俗の変化など，地理学から強く関心が持たれるテーマも扱われる。草津温泉における冬じまいや春の営業再開に薬師信仰が関わるとの指摘は，民俗学らしい解釈で興味深い。

第三章「ひなまつりの民俗」では，ひと形によるケガレの除去から飾り雛への移行を踏まえて，群馬県内のひなまつり習俗が紹介される。

第四章「赤城山―祖霊の籠る山」では，赤城の神がムカデであるとする伝承を軸に，赤城山信仰を日光山との対比により位置づける。

第五章「養蚕の民俗」では，桑の栽培と蚕の飼育を具体的に紹介したうえで，掃き立て祝いなど飼育時の儀礼や小正月の繭玉行事など予祝儀礼が紹介される。養蚕は，地理学においても重要テーマであるが，養蚕の豊凶を嫁の働きぶりと連動させ，「当たり嫁ご」「はずれ嫁ご」といったとらえ方が実在したことや，屑繭の処理が女性の副収入になったことなどは地理学ではさほど重視されずにおり，暮らしの具体像を描くうえで本書の指摘が参考になる。

第六章「水文化と川魚の民俗」では，渡良瀬遊水池に面し低湿地が多い板倉町（邑楽郡）に焦点を当て，治水，利水，信仰，祭礼，淡水魚食などを総合的に記述している。水と人間の関わりは地理学も重要視するテーマであるが，地理学では総合的把握を標榜しつつも現実の研究成果は治水と利水に特化し，淡水魚食など暮らしの具体相への着目は，皆無ではないものの手薄であったと目を

覚まされる。

第七章「七夕と眠り流し」は，七夕を構成する星祭り・盆行事・眠り（眠った・ネブタ）流しなどの要素と，群馬県内の諸行事との関わりが紹介される。

第八章「雷の民俗」は，主として雷に対する信仰から群馬県の位置づけおよび群馬県内における諸信仰の分布が示される。近年，この分野では地理学からも成果が出ているが，本書では貫前神社（富岡市）の「雷神小窓」（雷神の通路）が注目されており，歴史時代の自然認識を検討するうえで，好事例として興味深い。

第九章「石垣のある村―景観と生業の特色―」では，群馬県西部の山間地域に位置する南牧村（甘楽郡）に焦点を当て，山腹斜面に展開する石垣の景観を，耕地開発の歴史を踏まえて説述している。紙漉きやコンニャク生産といった生業変化や過疎化，人口の高齢化現象では，地理学による把握と共通性が多い。しかし，石垣積みに関しては「四つ八つ」の禁忌（一つの石に対して四つまたは八つの石が囲む状態を避ける）を初めとする伝承が詳しく記述されており，臨場感に富む。石垣の隙間に壊れた瀬戸物を置く習俗への注目も新鮮である。

第十章「長寿のあやかり―赤飯・長寿銭の民俗―」では，祝事につきものの赤飯が不祝儀の典型である葬儀に用いられる習俗が，群馬県の例を中心に紹介される。

第十一章「空っ風と民俗文化」では，風の地方呼称や風にまつわる俚諺が紹介されるとともに，屋敷林，畑のオタ（風よけ），民家の屋根型について，季節風との関わりが説述される。地理学との共通認識が多い章である。評者は，空っ風の恵みとしての「大根干し」という指摘に関心を持った。

第十二章「十二様と出産習俗」では，山の神であり女性神でもある「十二様」信仰の群馬県内での様相が紹介される。

付録「群馬の民俗行事概説」では，群馬県内で行われる主な年中行事や祭礼が季節ごとに分類され，群馬県全体を理解するために役立つ説明が付されている。

以上，内容をみていくと，本書は「民俗学からのアプローチ」と銘打たれてはいるが，地理学・歴史地理学が研究対象としてきたテーマがかなり含まれていることが確認できる。著者は，本書をまとめるにあたって「民俗学の視点から群馬県における生活文化の特色を浮き彫りにしようとした」（まえがき）と述べている。この言の後段にある「生活文化の特色を浮き彫りに」との問題意識は，地理学・歴史地理学にも共通するものである。本書を読み，地理学・歴史地理学における生活文化の記述を，より迫力あるものにすべきであるという考えを抱くのは評者一人ではないであろう。

群馬という魅力ある風土をいかに描くか。そして，描いた成果をいかに多くの人々に理解してもらうか。この課題には，学問間の切磋琢磨が必要である。

本書は，民俗学を専門とする方々にとって興味ある内容であろうことは申すまでもないが，地理学・歴史地理学を専攻する者にとって，同じ研究対象を隣接分野がいかに捉えているかを学ぶ絶好の内容でもあった。その点で，本書が地理学・歴史地理学の専攻者からも読まれることをお奨めしたいと思う。

（小口千明）